

# 子育ての探究 其二

## 飛鳥・奈良時代の古典に描かれた親子像

柴崎 正行

### 三人の先生

私は群馬高専時代に三人の先生方から大事なことを学んだ気がする。

化学のあじみ薊先生の最初の授業では一本のローソクを渡されて、それについて観察して気づいたことをすべて記述して考察しなさいという課題を出された。私は生まれ

て初めてローソクというものを、さまざまな視点から観察してみた。触った感じ、匂い、そしてローソクに火をつけて燃えているときの炎の様子や、煙の出方、匂いや熱さなど、考え得る限りの視点から探究をし、自分の気が付いたことを可能な限り記述してみた。

それによって、それまでは単なる火をともし古びた道具としか見えなかったローソクも、じっくり観察してい

くと多くのことが発見できることに驚いたし、また発見することによりローソクの持つ透明感の意味や炎のもつ美しさと燃えるということの本質にも追っていきけるということを知った。そして当たり前と思っている事象も、新たな視点からじつくりと観察をしていけば、それまで知らなかったり見えてこなかった本質に迫ることができるところを体験した。常識にとらわれないで物事を見ていく態度を持ち続けることこそが、本当の科学的な姿勢なのだということを蘊先生から学んだように思う。

日本史の藤木先生の授業も、楽しみな授業であった。それまで中学で学んだ制度史の裏側には、それぞれの人物の生きざまがあり、多くの農民や下等武士の生活があり、その人生や生活こそが日本の歴史をつくりあげてきたのだということを、何度も話してくれた。藤木先生の授業では、それぞれの時代に、なぜ制度や体制が変わったのかを、著名な人物の人間関係や社会問題をからめて説明してください、その変化のために当時の社会や生活に生じた不安や楽しみとからめて文化や宗教などについて

ても説明してくれた。歴史とはこういう仕組みで成り立っていたのかと、自分の歴史観が全く変わったことを覚えていた。それ以来歴史が大好きになり、特に歴史的な人物を描いた歴史小説が愛読書のひとつになった。

三人目の先生は、倫理学と古文の笠井先生である。この先生の授業は、男女の恋愛論が中心であった。特に日本の古代からの短歌や物語に描かれた男女の愛の表現とその時代背景などについて、詳しく語ってくれた。それまでは名前を記憶する対象でしかなかった古事記や万葉集、そして源氏物語などの中に、当時の人々の男女や親子の愛情や悲しみがたくさん描かれていることを教えられた。つまらなかつた古典が、それ以来大好きな科目のひとつとなったことを思い出す。源氏物語などの現代語訳を読むようになったのもこの頃であった。笠井先生は数年前に亡くなられたが、古典を好きにしてください、そのことを感謝している。

高専を卒業後は子どもの臨床に関心を抱き、そこから保育学の必要性を悟り、その後にある育児の歴史観を

明らかにすることをこの連載での課題にしている私にとって、ここに至る過程は自分の人生においてそれなりに必然性があつたのだと実感できる。日本の親子関係と育児を書くに当たって、先生方への感謝も込めてそのことを書きとめておきたかつたのである。

### 『万葉集』に描かれた母子の関係

私は古文書の専門家でも、歴史の専門家でもない。そこで、その分野の専門書を引用しながら、親の愛情について考察を進めていきたい。

三浦佑之はその著書『万葉びとの「家族」誌―律令国家成立の衝撃―』において、『万葉集』には親子関係を題材にした歌が数多く残されていることを明らかにしている。父・母という語を読み込んだ歌だけでも八十首あり、そのうちの大多数は作者未詳か防人歌で占められており、しかも息子が親を歌っているのは防人歌に限られそのほとんどが「母親」に向いているのである。

防人歌とは東国から九州の防衛へと旅立つ二十代から

三十代にかけての兵士の歌であるから、東国における親子関係において、息子の母親への思慕が強かったことを意味しているという。しかもその歌の内容は、母親を花や玉になぞらえており、身につけて旅をしたいと歌っているのである。この内容の意味について、当時は母親が神のような霊力をもつ守護者・援助者と考えられていたと三浦は解釈している。母は息子の無事を祈る者であり、息子は母への慕る思いを抱き続けていることがわかる。受験に向かう息子の合格を祈る現在の母親の姿とも重なってくるものがあるといえよう。

では母親と娘の関係はどうだったのであるうか。三浦によれば、万葉集には母と娘の関係も数多く歌われているそうである。しかもその歌の内容を検討すると、年頃の娘をもった母親がその行動を監視し、娘はそれと対立して恋心を抱くという構図が描けるそうである。おそらくは当時は主に母親の家に親子で住んでいたもので、恋におちたときには男性が娘を訪問したのであろう。それを母親が監視して、許したり拒否したりしていたのかも知

れない。その母親の監視を盗んで恋人と逢っている娘の姿は、女友達と一緒に偽って恋人と逢っている現在の女子学生の姿とも重なってくる。

防人という兵役に着くことにより、息子たちは母親への思いを募らせ、一方恋を通して娘たちは母親から離れ自立していくというのが、当時の母子関係の姿だったようである。

### 『風土記』や『古事記』に描かれた父子の関係

『万葉集』には父親のことがほとんど出てこないが、『出雲風土記』や『古事記』、そして『日本書紀』などに描かれた伝承や説話には父と息子、父と娘の関係を描いた話がたくさんでてくることを三浦は示している。

娘を殺したワニに復讐をする話（『出雲風土記』）や、娘の結婚は父親の許しを得てから可能になること（『古事記』）などが、よく描かれているという。その背景には、父親は娘や息子を守る存在であったこと、それは家族に生じた危機は父親によって守られ、もしそこに歪み

が生じた場合には父親によって修復されるという父親観が存在していたことがわかるという。

また父親は家を代表して娘の結婚の許諾権を有しており、娘を与えるとともにその夫になる男性には「百取の机代の物」という、今でいう花嫁道具のようなものを贈ったという。しかし『風土記』や『古

事記』、『日本書紀』などの話は、あくまでも天皇や豪族である場合が多いので、これを必ずしも当時の民衆一般の父と娘の関係とすることはできないであろう。

これに対して、父親は息子に対しては成長させる存在であり、息子は父親の援助により一人前になっていく存在として描かれているという。例えば、物言わぬ息子を何とかして発語させようと腐心したり（『出雲風土記』）、物言わぬ息子を小舟に乗せて揺らすことにより発語させようと苦心したり（『古事記』）、成長し



た息子に自分の地位や財産を譲ることによって跡継ぎにする（『日本書紀』）という話などがよくある。

こうした話の背景には、古代から飛鳥時代にかけて描かれた神話や伝承には、父親はわが子を成長させるといふ父子原理が強く現れているといえるという。その父子原理はいつも安定したものとは限らず、成長した息子が父親を凌ぐ競争相手にもなり、そこには父と息子の対立も生じたようである。『古事記』や『日本書紀』には、こうした対立を描いた話がたくさんあるという。

いまも父親と息子が対立することはよくあるし、そうした対立を乗り越えてこそ、息子は自立した存在になっていくのである。

### 律令国家成立と親子関係の変化

以上見てきたように、『古事記』『万葉集』などに描かれている母親は、子を産み育てる存在であり、子どもを棄てる母親などはあり得ないという描き方がなされていた。また父親も娘や息子を守る存在として認識されていた。

た。

しかし七〇一年に大宝律令が施行され、個人に課税する班田収授法という新たな税制度が確立すると、その律令体制を管理する機構として平城京が造営された。この都市の成立と市場経済の発展により、人々の生活は大きく変貌し、それに伴って親子関係も大きく変化していったという。

私も平城京の跡に立つたことがあるが、広大な敷地と整備された都市であったことを示す遺跡を前にして、その規模の大きさに圧倒されたことを覚えている。当時の日本の人口は五〇〇万人前後であつたらしいが、平城京は人口が一〇万人ほどであり、天皇から貴族、僧尼、中下級官吏、商人や職人そして奴婢に至るまで、あらゆる階層の人々が生活していた。

平城京の東西には市が設けられ、ほとんどの人々は生産せずに消費をしていたという。日本で最初の消費型の大都市が出現したわけである。そしてここで生活する人々は、律令制度とともに中国から日本にもたらされた

儒教思想を身につけていく人々であり、学問と才能によつて財産を蓄えていく日本初の都市型中産階級を形成していく人々でもあった。

その都市型中産階級の中心は「宮人」という新たな階層である。現在でいえば国家公務員という職業であろうか。この階層は、貴族など一部の人々を除けば、それまでにはなかった消費だけをする人々でもあった。この消費中心の生活が、それまでの親子関係を著しく変えていくことになったのである。

### 『日本霊異記』に描かれた母子の関係

『日本霊異記』は正式には『日本国現報善悪霊異記』という書名で、全部で一一一話からなる説話集であり、大半は八世紀に描かれたとされている。三浦（一九九六）によれば、この『日本霊異記』は平城京という都市が成立し、貨幣の流通により商品経済が行き渡るようになり、人々の意識や生活が大きく変わりつつあった八世紀の世相を映した唯一の説話集であるという。

この説話には、約三〇例の親子関係が描かれているが、そのほとんどは親と子のいわゆる「核家族」が中心であるという。そしてそれまでの古典では描かれなかった、自分の子どもを棄てて養育しない母親が登場してくるのである。

若いころ幼い我が子を棄てて男と遊び、何日も乳を与えなかつた罪のために、乳房が大きく腫れてしまった女がいたが子どもたちはそうした悪い母を許したと称賛される話がある。ここには、子を産み育てることこそが「善い母親」であり、それを放棄するのは「悪い母親」であるという儒教的な「慈悲」像が象徴的に描かれているといえよう。

また性格が貞淑で夫によく仕えている女が、七人の子を産んだが、家はきれいに掃除し、子どもたちと一緒に笑顔を忘れず、感謝の心を忘れずに食べることを心がけていたところ、その風流な行いが神仙に感応したのか、偶然にも仙草を食べて天に飛んでいったという話がある。この説話は、この女の行いこそ理想的な母親である

という慈母像が描かれているといえよう。

奈良時代にはこのように理想的な母親としての慈母像が成立する一方で、親子関係がこれまでにないような状況に追い込まれつつあったことも描かれている。

「出拳」という制度によって出世した息子から、母親が稲を借りたが返済できなくなったところ、息子はきびしく督促し返済を迫ったという。すると母親は自分が息子に飲ませた乳の代価を要求し、母と子の縁を切った話がある。この説話では、息子が母親に負債の返済を迫ったことを話題にしているが、すでにこの当時から、母子であつても貸し借りの契約関係が成立すると考える人々が増えつつあったことを示しているといえよう。その背景には、平城京に成立した市場経済の問題や財物の私有化という問題が横たわっているのである。

### 飛鳥・奈良時代における子育ての特徴

三浦（一九九六）は、律令体制の確立がわが国の親子関係とくに母親の存在をきわめて不安定なものにして

いったことを指摘している。

第一に、六歳になると男女に等しく口分田が与えられ、死ぬまで田祖がかけられたが、土地は一族や一家の所有という觀念が崩壊し、個人のものという觀念が成立したことよつて、それまでの共同体としての家族意識の中に個の意識が生まれてきたことである。このことが親子の間でも稲の貸借をめぐる対立関係を生みだしたのである。女性は子どもが小さいときには慈母としての役割を果たすことを求められ、老いては自分の田祖の分だけは労働することを要求されるようになり、老後を子どもによつて養ってもらえることは必ずしも保障されなくなったのである。

第二に、藤原京や平城京を初めとする都市には、多くの律令官人とその家族たちが生活するようになり、その人たちは命令のままに地方に赴任した。その赴任に当たつては妻と子どもを連れて行つたので、ここに夫婦同居という核家族形態が成立し、都には老いた母親たちが残され、子どもや孫を心配しながら帰京を待ちわびてい

るといふ姿がみられるようになったことである。それまでの三世同居という家族生活が、都市やその赴任先の町では次第に崩壊していくことになるのである。その中で京に残された母親が遠く離れている娘に対して強い愛着を抱いていたことが示されている。

第三に、飛鳥時代までは家族という生活共同体は三世代が同居して土地を耕すことによつて生活していたので、親子関係や母親と父親の役割は安定していたが、奈良時代になると個人意識や核家族が成立してきて、親子関係が次第に不安定になってきた。そのためにそれまでの古典では描かれなかつた母親が子を棄てる話や子が親を棄てたり殺す話が、出現してくるのである。

私は三浦（一九九六）の本から、飛鳥・奈良時代の子育てについて多くのことを学んだように思う。もちろん他の研究からそれを裏付けたり修正していくことが必要なことはいままでもない。しかし律令体制下の平城京の官人の子育ては、まさに平成という現在に生きている我々が直面している姿と重なってくるのである。これは

消費中心の都市生活者という共通の生活形態によつて生みだされる問題なのであろうか。平城京の人々の子育てをもっと詳しく研究した文献を探していきたいと思う。

（東京家政大学）

#### 引用文献

三浦佑之『万葉びとの「家族」誌―律令国家成立の衝撃―』講談社選書メチエ 一九九六年

